

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19（共通）

科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 5 年 6 月 6 日現在

機関番号：26402

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2022

課題番号：21K20288

研究課題名（和文）ほめることが「ほめ手」に与える影響：親を対象とした検討

研究課題名（英文）Effects of praise on the "praiser": An investigation of the effects on parents

研究代表者

柿沼 亨祐（Kakinuma, Kyosuke）

高知工科大学・経済・マネジメント学群・助教

研究者番号：00909236

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、ほめることが「ほめ手」に与える影響を検討することである。特に親への影響に焦点を当て、親が子どもをほめることが、親の仕事への動機づけに影響を与えるかどうかを検討した。調査の結果、親が子どもを努力についてほめる頻度と、親の仕事の達成志向的動機づけの間に正の関連が示された。行動実験の結果、子どもの努力についてほめることが仕事の動機づけに与える影響は、親の職務パフォーマンスによって異なることが示され、職務パフォーマンスが低い人でのみ、子どもを努力についてほめた条件は、ほめなかった条件と比べて、仕事の達成志向的動機づけが高いことが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

子どもがいる世帯の約70%は共働きの世帯であり、夫婦が共同で子育てを行うことが重視される現代社会において、親は子育てと仕事を両立することが求められる。本研究は、子育てと仕事の2つの領域を結びつけて検討することで、子どもを努力についてほめることが、親自身の仕事の動機づけを改善する可能性を示した。親は子どもをほめる際はほめ方にも注意を払い、努力に焦点を当てることで、子どもだけでなく自分自身にも、望ましい効果が得られる可能性がある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the present study was to examine effects of praise on the "praiser". Especially, I focused on the effects on parents and investigated whether parents' offering praise to their children affected the parents' work motivation. The results of a survey showed a positive relationship between the frequency of parents' effort-focused praise and their work accomplishment striving. More importantly, the results of an experiment showed that the effect of effort-focused praise on work motivation differed depending on work-related performance and suggested that parents with low work-related performance exhibited higher levels of work accomplishment striving in the effort-praise condition compared to the no-praise condition.

研究分野：動機づけ

キーワード：動機づけ ほめ 親 努力 才能

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

ほめることは、子どもの学習意欲の向上などの効果が期待され、家庭や学校で推奨されている(文部科学省, 2017)。先行研究によると、ほめの動機づけに対する効果はほめ方によって異なり、子どもは才能をほめられると(e.g., かしいね)、そのあと失敗を経験した際に才能がないと感じ、興味や粘り強さが減少する一方で、努力をほめられると(e.g., 頑張ったね)、失敗をしても興味・粘り強さが持続する(Corpus & Good, 2020)。このようなほめの効果は受け手のみではなく、ほめを行う人である「ほめ手」にも生じることが明らかになっている(Kakinuma, Nakai, Hada, Kizawa, & Tanaka 2020; Kakinuma, Nishiguti, Sonoda, Tajiri, & Tanaka, 2020; Kakinuma, Nishiguti, Sonoda, Tajiri, & Tanaka, 2021)。これらの研究は、友人をほめることが、ほめを行った学生自身の課題の動機づけに与える影響を検討した。その結果、友人に客観的コメントを行った統制条件に比べ、才能ほめを行った条件では、その後に自分の課題で失敗を経験した際に、課題への興味とパフォーマンスが低いこと、努力ほめを行った条件では粘り強さが高いことが示された。

しかし、これまでのほめ手に関する研究は生徒間でのほめという、対人場面の一側面しかとらえておらず、応用範囲が限定的である。親からのほめは、友人からのほめに比べて、子どもの才能や努力を評価する側面がより強い傾向にあることをふまえると(Henderlong & Lepper, 2002)、親に対する影響の方が大きい可能性も考えられる。そのため、友人関係での知見を親子関係に安易に一般化できない。家庭で親が子どもをほめることが推奨されているのであれば、親への影響も検討する必要がある。

2. 研究の目的

本研究では、子どもの努力または才能についてほめることが、ほめ手である親の仕事の動機づけに与える影響について検討した。まず、調査を行い、親が努力や才能について子どもをほめる頻度と、仕事の動機づけとの関連を検討した。次に、ほめ方を実験操作して、親が子どもをほめることが、親自身の仕事の動機づけに与える影響を検討した。先行研究では、ほめ方の違いによる動機づけへの影響は、特に受け手やほめ手が失敗を経験した後に生じていることをふまえると、子どもをほめることが親の仕事の動機づけに与える影響は、親の職務パフォーマンスが低い場合に生じる可能性がある。そこで、実験ではほめ方と職務パフォーマンスの交互作用から仕事の動機づけへの影響を検討した。

3. 研究の方法

(1) 子どもをほめる頻度と仕事の動機づけの関連

小学生～高校生の子どもの同居しており常勤の仕事をしている親 642 名(平均年齢 47.02 歳, $SD = 6.08$; 男性 525 名, 女性 115 名, 性別不明 2 名)を対象に調査を行った。直近 1 ヶ月間で、長子を努力に関する言葉を使ってほめた頻度(e.g., 頑張った; $\alpha = .83$)、才能に関する言葉を使ってほめた頻度(e.g., かしい; $\alpha = .79$)、仕事の達成志向的動機づけ(e.g., 私は自分の職務を完了させるまで粘り強く取り組んでいる; $\alpha = .94$)(Barrick et al, 2002; 池田・森永, 2017)、仕事の楽しさ(e.g., 仕事をするのは楽しい; $\alpha = .83$)(Ryan, 1982)を測定した。また、統制変数として、職務パフォーマンス(e.g., 任された役割を適切に果たしている; $\alpha = .80$)(Williams, 1991; 池田 他, 2020)、職務での競争性(私の仕事は他の同僚と競い合うことが求められている)(池田・森永, 2017)、職務での学習必要性(私の仕事に必要な知識やスキルは、絶えず新しいものが求められる)(池田・森永, 2017)も測定した。

(2) 子どもをほめることが仕事の動機づけに与える影響

小学生の子どもがおり常勤の仕事をしている親 396 名(平均年齢 45.87 歳, $SD = 5.22$; 男性 315 名, 女性 81 名)を対象に実験を行った。実験参加者はまず過去 1 ヶ月間の仕事の達成志向的動機づけ($\alpha = .95$)、職務パフォーマンス($\alpha = .82$)、職務での競争性、職務での学習必要性に関する質問項目に回答した。そして、参加者は、自分の子どもが成功したエピソードを記述した後に、その子どもを、努力についてほめる文章を記述する条件、才能についてほめる文章を記述する条件、ほめる文章は記述しない条件の 3 つの条件のいずれかにランダムに割り振られた。子どもの成功エピソードの記述とほめる文章の記述を 3 回ずつ繰り返した後、参加者は今後 1 ヶ月間の仕事の達成志向的動機づけ($\alpha = .96$)と、仕事の楽しさ($\alpha = .85$)に回答した。なお、それぞれの質問項目は調査と同様のものを使用した。

4. 研究成果

(1) 子どもをほめる頻度と仕事の動機づけの関連

子どもを努力についてほめた頻度、子どもを才能についてほめた頻度、仕事の達成志向的動機づけ、仕事の楽しさ、職務パフォーマンス、職務での競争性、職務での学習必要性、年齢、性別、

長子の年齢、長子の性別、子どもの数の偏相関係数を算出した。その結果、努力ほめの頻度と仕事の達成志向的動機づけの間に有意な正の関連が見られた ($r = .128, p = .001$)。一方、才能ほめの頻度と仕事の達成志向的動機づけの間には有意な関連は見られなかった ($r = .052, p = .194$)。努力ほめ頻度と仕事の楽しさの関連、才能ほめ頻度と仕事の楽しさの関連は有意ではなかった (それぞれ、 $r = .020, p = .618$; $r = -.039, p = .324$)。

(2) 子どもをほめることが仕事の動機づけに与える影響

各条件での仕事の達成志向的動機づけ、仕事の楽しさ、職務パフォーマンスの平均値と標準偏差を Table 1 に示す。分析の際、実験条件をダミーコード化した。ほめなし条件を参照条件として設定し、ほめなし条件と努力ほめ条件を比較する努力ほめコード (ほめなし条件 = 0, 努力ほめ条件 = 1, 才能ほめ条件 = 0) と、ほめなし条件と才能ほめ条件を比較する才能ほめコード (ほめなし条件 = 0, 努力ほめ条件 = 0, 才能ほめ条件 = 1) の 2 つのコードを作成した。説明変数を各コード、職務パフォーマンス、各コードと職務パフォーマンスの交互作用項、結果変数を今後 1 ヶ月間の仕事の達成志向的動機づけ、仕事の楽しさとする重回帰分析を行った。その際、過去 1 ヶ月間の仕事の達成志向的動機づけ、職務での競争性、職務での学習必要性、年齢、性別、長子の年齢、長子の性別、子どもの数、子どもの成功エピソードの文章の文字数を統制した。

Table 1
行動実験での各変数の平均値と標準偏差

	M	SD	可能得点 範囲
過去1ヶ月間の仕事の達成志向的動機づけ			1-7
ほめなし条件	4.90	1.16	
努力ほめ条件	4.81	1.09	
才能ほめ条件	4.79	1.01	
今後1ヶ月間の仕事の達成志向的動機づけ			1-7
ほめなし条件	5.09	1.14	
努力ほめ条件	5.01	1.03	
才能ほめ条件	4.92	0.95	
仕事の楽しさ			1-7
ほめなし条件	4.62	1.41	
努力ほめ条件	4.59	1.27	
才能ほめ条件	4.58	1.29	
職務パフォーマンス			1-7
ほめなし条件	5.02	0.95	
努力ほめ条件	4.79	0.91	
才能ほめ条件	4.92	0.86	

まず、ほめの主効果に関して、努力ほめコード、才能ほめコードから仕事の達成志向的動機づけへの影響は有意ではなかった (それぞれ、 $b^* = .012, p = .708$; $b^* = -.020, p = .508$)。交互作用に関して、才能ほめコード×職務パフォーマンスの交互作用項からの影響は有意ではなかった一方で ($b^* = .045, p = .156$)、努力ほめコード×職務パフォーマンスの交互作用項から仕事の達成志向的動機づけへの影響は有意であった ($b^* = -.068, p = .030$)。単純傾斜分析の結果 (Figure 1)、職務パフォーマンスが低い人では、努力ほめコードから仕事の達成志向的動機づけへの正の効果が有意傾向であった ($b^* = .080, p = .061$)。職務パフォーマンスが高い人では、努力ほめコードからの効果は有意ではなかった ($b^* = -.055, p = .225$)。仕事の楽しさに対しては、努力ほめコードや才能ほめコードからの影響 (それぞれ、 $b^* = .023, p = .569$; $b^* = .030, p = .445$)、各ほめコードと職務パフォーマンスの交互作用項からの影響 (それぞれ、 $b^* = -.054, p = .180$; $b^* = -.018, p = .665$) のいずれも有意ではなかった。

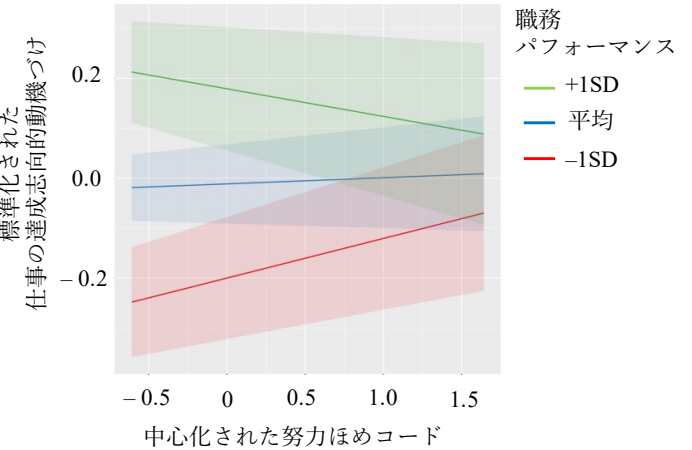


Figure 1. 努力ほめコード×職務パフォーマンスの交互作用から仕事の達成志向的動機づけへの影響

(3) まとめ

本研究の結果、(1) 子どもを努力についてほめる頻度と仕事の達成志向的動機づけの間に正の関連があること、(2) 子どもをほめることが仕事の動機づけに与える影響は、親の職務パフォーマンスによって異なり、職務パフォーマンスが低い人でのみ、子どもを努力でほめた場合、ほめなかった場合と比べて、仕事の達成志向的動機づけが高くなることが示唆された。今後は、親が子どもを実際にほめる手続きを用いた行動実験を行うことで、より生態学的妥当性の高い知見を示す必要があるだろう。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1 . 著者名 Kakinuma, K., & Izuma, K.	4 . 巻 -
2 . 論文標題 Autonomy-supportive teaching algorithm which fosters independent learners.	5 . 発行年 2023年
3 . 雑誌名 Proceedings of the 45th Annual Conference of the Cognitive Science Society	6 . 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6 . 研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7 . 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------